

概均値 vector 空間に付随する, Dirichlet 級数の一例.
東大 理数 新谷 卓郎

§0 導入

まず Riemann の zeta 函数の函数等式の証明を復習しよう。 $\varphi(x)$ を実軸上の急減少函数, $s \in \mathbb{C}$ とし

$$Z_{\varphi}(s) = \int_0^{\infty} \sum_{\substack{x \in \mathbb{Z} \\ x \neq 0}} \varphi(tx) t^s dx$$

とおく。 $\text{Re } s > 1$ なるとき, 上記積分は絶対収束して

$$Z_{\varphi}(s) = \int_{-\infty}^{\infty} \varphi(x) |x|^{s-1} dx \quad \text{に等しい。}$$

一方 Poisson の $-\infty$ 和公式によれば,

$$Z_{\varphi}(s) = \int_1^{\infty} \sum_{0 \neq x \in \mathbb{Z}} \varphi(tx) t^s dx - \frac{1}{s} \varphi(0) + \int_1^{\infty} \sum_{0 \neq x \in \mathbb{Z}} \varphi(tx) t^{1-s} dx + \frac{1}{s-1} \hat{\varphi}(0)$$

$$\left(\hat{\varphi}(x) = \int_{-\infty}^{\infty} \varphi(y) e^{2\pi i \sqrt{x} y} dy \right)$$

なる等式が $\text{Re } s > 1$ において成立する。従って $Z_{\varphi}(s)$ は $s=0, s=1$ に高々一位の極をもつ有理型函数に解析接続され, かつ函数等式

$$Z_{\varphi}(1-s) = Z_{\varphi}(s) \quad \text{を満足することになる。}$$

一方 $\text{Re } s > 0$ において積分

$$\int_{-\infty}^{\infty} \varphi(x) |x|^{s-1} dx$$

は絶対 $-\infty$ 収束するか, これを s の函数として全平面で有理形な函数に解析接続され, 函数等式

$$\int_{-\infty}^{\infty} \varphi(x) |x|^{s-1} dx = 2^{1-s} \pi^{-s} \cos \frac{\pi s}{2} \Gamma(s) \int_{-\infty}^{\infty} \varphi(x) |x|^{-s} dx \quad (\#)$$

を満足する。従って、 $\zeta(s)$ を全平面で有理形の函数へ接続され、函数等式

$$\zeta(1-s) = 2^{1-s} \pi^{-s} \cos \frac{\pi s}{2} \Gamma(s) \zeta(s)$$

を満足することがわかる。

すなわち $\zeta(s)$ の函数等式の根拠は Poisson の和公式と変換則 (#) であるといふことができる。

佐藤幹夫氏は 概均質 vector 空間の理論を建設して “正則概均質 vector 空間” V の相対不変式の複素中が (#) と類似の変換則を満足することを示し、 V 内の格子と相対不変式に対応する ζ 函数に類似の “distribution valued meromorphic function” を作、その函数等式を証明された。筆者は以下的小文において特別な場合について 概均質 vector 空間と其中的格子に普通の \mathbb{C} -valued Dirichlet 級数を対応させることを試みた。すなわち §1. において最も簡単な状況における 概均質 vector 空間 V の理論の主結果を要約し、ついで V と其中的格子に付随す

る“Tate型積分”を考察し、極めて強い仮定のもとに、それから函数等式を満足するDirichlet級数を取りだしうることを示した。§2においては、実Hermité行列のなすvector spaceと、Gauss整数を行列要素とするHermité行列のなす格子とについては、§1の仮定が満足されることを示し次の結果を得た。

定理

$L^{(n)}$ を Gauss の整数を行列要素とする n 次 Hermité 行列の作る格子とし、 $L^{(n)*}$ を、対角元がすべて偶数なるものよりなる $L^{(n)}$ の部分格子とする。

$m_i(\ell)$ を、Sylvester index が $(i, n-i)$ 行列式が $(-1)^{n-i} \ell$ なる L の元達のなす種達の“種の測度”の和であるとする。さすれば Dirichlet 級数

$$\sum_i^{(n)}(\Delta) = \sum_{\ell=1}^{\infty} \frac{m_i(\ell)}{\ell^{\Delta}}$$

$$\sum_i^{(n)*}(\Delta) = \sum_{\ell=1}^{\infty} \frac{m_i^*(\ell)}{\ell^{\Delta}}$$

($m_i^*(\ell)$ は $L^{(n)*}$ について $m_i(\ell)$ と同様に定義される) はともに $\text{Re } \Delta > n$ で絶対収束し、 $\Delta = 1, 2, \dots, n$ に高々一位の極をもつ

有理型函数に解析接続され、函数等式

$$\begin{aligned} & \xi_i^{(n)}(n-s) \\ &= \pi^{-s} n + \frac{n(n-1)}{2} \Gamma(s) \Gamma(s-1) \dots \Gamma(s-n+1) \times \\ & \times \sum_{j=0}^n (-1)^{(n-j)(n-1)} \pi^{j-1} \Gamma\left(\frac{n}{2} - i - j\right) \sum_{k=0}^j \binom{j}{k} \binom{n-i}{j-k} e^{2\pi i k j} \times \\ & \times \xi_j^{(n)*}(s) \end{aligned}$$

を満足する。 $\prod_{k=1}^n (s-k) \xi_i^{(n)}(s)$ は位数高々 $n-1$ の整函数である。 乃ち $\xi_i^{(n)}(s)$ の極における residues を explicit に計算できる。

§1 V を実数体上の vector 空間, G を $GL(n)$ 内の 連結実線型代数群 とする。 V 内に代数的集合 S が あつて, $V-S$ 内の点を通る G の任意の orbit が V 内の開集合となつていゝとき, 対 (G, V) を 概均質 vector 空間 とよび, S を その特異点集合 といふ。 以下 G の V への作用 を

$$(g, x) \longrightarrow g \cdot x \quad (g \in G, x \in V)$$

と書く。 V の双対を V^* とし, G は V^* に反傾的に作用 するとして, その作用を

$$(g, y) \longrightarrow {}^t g^{-1} \cdot y \quad (g \in G, y \in V^*)$$

と書く。 定義より,

$$\langle g \cdot x, {}^t g^{-1} \cdot y \rangle = \langle x, y \rangle \quad (x \in V, y \in V^*)$$

である。 V 上の多項式 P は, G の適当な有理指標 χ が存在して, $P(gx) = \chi(g)P(x)$ ($\forall g \in G, x \in V$) が成立するとき, (G, V) の指標 χ の相対不変式とよばれる。以下 (G, V^*) を根平均質として, その特異点集合を S^* とする。 V^* の相対不変式も同様に定義される。

以下 V, V^* の相対不変式 P, Q が存在して

$$P(gx) = \chi(g)P(x), \quad Q({}^t g^{-1} \cdot y) = \chi^{-1}(g)Q(y)$$

であり, $x \in V - S, y \in V^* - S^*$ なるとき, x, y の等方群を H_x, H_y とおけば, χ は一次元 torus $G/H_x [G, G], G/H_y [G, G]$ の指標群の有限 index の部分群を生成し, さらに P の jacobian は $V - S$ で非退化であると仮定する。このとき

$V - S, V^* - S^*$ は同数個の連結成分の和となり, 各々の連結成分は G の一つの orbit となる。それらを $V - S = \bigcup_{i=1}^l V_i, V^* - S^* = \bigcup_{i=1}^l V_i^*$ とおこう。

P, Q の次数は等しい。それを d とする。いま d 次の多項式 $b(s), b^*(s)$ を

$$Q(\text{grad}_x) P^d(x) = b(s) P^{d-1}(x)$$

$$P(\text{grad}_y) Q^d(y) = b^*(s) Q^{d-1}(y)$$

として定義する。 V, V^* の Euclid measure dx, dx^* を互いに dual であるように定める。すなわち $\varphi \in \mathcal{S}(V)$

(以下 V における急減少関数の空間を $\mathcal{S}(V)$, V^* におけるそれを $\mathcal{S}(V^*)$ とかく) とするとき

$$\hat{\varphi}(y) = \int_V \varphi(x) e^{2\pi i V^{-1} \langle x, y \rangle} dx$$

$$\iff \varphi(x) = \int_{V^*} \hat{\varphi}(y) e^{-2\pi i V^{-1} \langle x, y \rangle} dy^*$$

であるとしよう。さすれば " $\operatorname{Re} s > 0$ " で定義される s

の解析関数 $\int_{V_i} \varphi(x) |P(x)|^s dx$, $\int_{V_i^*} \varphi^*(y) |Q(y)|^s dy^*$ は, $\operatorname{Re} s$ が十分大になるとき成立する等式

$$\int_{V_i} Q(\operatorname{grad}_x) \varphi(x) |P(x)|^s dx$$

$$= (-1)^d (\operatorname{sgn}_i P) b(s) \int_{V_i} \varphi(x) |P(x)|^{s-1} dx$$

$$\int_{V_i^*} P(\operatorname{grad}_y) \varphi^*(y) |Q(y)|^s dy^*$$

$$= (-1)^d (\operatorname{sgn}_i Q) b^*(s) \int_{V_i^*} \varphi^*(y) |Q(y)|^{s-1} dy^*$$

($\varphi \in \mathcal{S}(V)$, $\varphi^* \in \mathcal{S}(V^*)$ とし

$\operatorname{sgn}_i P$ は V_i における P の符号を意味する)

を用いて全平面で有理型なる解析関数に接続される。(以上を通じて, P, Q は V, V^* と実数値をとると仮定されている)。以上の状況のもとで次の定理が成立する。

定理 A (M. Sato)

φ を $\mathcal{S}(V)$ の元とする時, 次の変換公式が成立す。

$$\begin{aligned}
 & \theta(s) = \theta_0 \prod_{i=1}^n (s - s_i) \quad d(gx) = |X(g)|^{-1} dx \\
 & \text{とすれば} \quad (n = \frac{n}{d} \text{ である}) \\
 & \int_{V_i^*} |Q(y)|^{s-n} \hat{\varphi}(y) dy^* \\
 & = \theta_0^s (2\pi)^{-ds} (\sqrt{-1})^{ds} \prod_{k=1}^d \Gamma(s + s_k) \times \\
 & \times \sum C_{ij}(s) (\operatorname{sgn}_i Q \operatorname{sgn}_j P)^{-s} \int_{V_j} |P(x)|^{-s} \varphi(x) dx \\
 & \quad (C_{ij}(s) \text{ は } e^{2\pi i \nu_j s}, e^{-2\pi i \nu_i s} \text{ のある多項式}).
 \end{aligned}$$

以下 L を V 内の格子とし, L^* を L の双対格子とする。

すなわち

$$L^* = \{ y \in V^*, \langle x, y \rangle \in \mathbb{Z} \text{ for } \forall x \in L \}.$$

$$\text{いま } L' = L - (L \cap S), \quad L'^* = L^* - (L^* \cap S^*)$$

とおき, Γ を L を不変にする G の離散的部分群として

次の "Tate 型積分" を考える。すなわち $\varphi \in \mathcal{S}(V)$,

$\varphi^* \in \mathcal{S}(V^*)$, $s \in \mathbb{C}$ なるとき

$$Z_{\varphi}^L(s) = \int_{G/\Gamma} |X(g)|^{-s} \sum_{x \in L} \varphi(gx) dg$$

$$Z_{\varphi^*}^{L^*}(s) = \int_{G/\Gamma} |X'(g)|^{-s} \sum_{y \in L^*} \varphi^*(g^{-1}y) dg$$

ただし dg は G (unimodular とする) の不変測度

である。 L あるいは L^* の二元 x_1, x_2 が Γ の作用で

たがいにうつり得るとき, 両者は同値であるといひ,

$x_1 \sim x_2$ とかく。 $L \cap V_i$ の諸元の同値類の代表系を $\{x_i(\nu) \quad \nu=1, 2, \dots\}$,

$L^* \cap V_i^*$ の同値類の代表系を

$$\{y_i^*(\nu) \quad \nu=1, 2, \dots\}$$

とかく。 G, Γ の部分群 $H_{i,\nu}, \Gamma_{i,\nu}$ を次の如く定義する。

$$H_{i,\nu} = \{g \in G, g \cdot x_i(\nu) = x_i(\nu)\}$$

$$\Gamma_{i,\nu} = \Gamma \cap H_{i,\nu}$$

$G/H_{i,\nu}$ は写像 $g \in G/H_{i,\nu} \rightarrow g \cdot x_i(\nu)$ によって V_i と同一視される。測度 $|P(x)|^{-2} dx$ が、(これは定理 A で定義された) V_i の G 不変測度であることに注意して、 $H_{i,\nu}$ の左不変測度 $dh_{i,\nu}$ を、 $dg = |P(g \cdot x_i(\nu))|^{-2} d(g \cdot x_i(\nu)) dh_{i,\nu}$

なるように定め、

$$m(x_i(\nu)) = \int_{H_{i,\nu}/\Gamma_{i,\nu}} dh_{i,\nu} \quad \text{と定義する。}$$

$H_{i,\nu}^*, \Gamma_{i,\nu}^*$ $m(y_i^*(\nu))$ を同様に定義される。いま次の仮定を“仮定 I”とよぼう。

仮定 I Dirichlet 級数

$$\xi_i(s) = \sum_{\nu=1}^{\infty} \frac{m(x_i(\nu))}{|P(x_i(\nu))|^{-s}}$$

$$\xi_i^*(s) = \sum_{\nu=1}^{\infty} \frac{m(y_i^*(\nu))}{|Q(y_i^*(\nu))|^{-s}}$$

は $\operatorname{Re} s$ が十分大なるとき絶対収束する。

命題 1. 仮定 I が成立するならば, $Z_{\varphi}^L(s)$, $Z_{\varphi^*}^{L^*}(s)$ を定義する積分は $\operatorname{Re} s$ が十分大なるとき絶対収束し, 等式

$$Z_{\varphi}^L(s) = \sum_{i=1}^l \xi_i(s) \int_{V_i} |P(x)|^{s-2} \varphi(x) dx$$

$$Z_{\varphi^*}^{L^*}(s) = \sum_{i=1}^l \xi_i^*(s) \int_{V_i^*} |Q(y)|^{s-2} \varphi^*(y) dy^*$$

が成立する。

一方 Poisson の和公式によつて Z_{φ}^L , $Z_{\varphi^*}^{L^*}$ は次の如く変形される。

$$Z_{\varphi}^L(s) = \int_{\substack{G/\Gamma \\ |X(g)| \geq 1}} |X(g)|^{-s} \sum_{x \in L} \varphi(gx) dg$$

$$+ c_2 \int_{\substack{G/\Gamma \\ |X^*(g)| \geq 1}} |X^*(g)|^{2-s} \sum_{y \in L^*} \hat{\varphi}(g^{-1}y) dg$$

$$- \int_{\substack{G/\Gamma \\ |X(g)| \leq 1}} |X(g)|^{-s} \sum_{x \in L \cap S} \varphi(gx)$$

$$- c_2 \sum_{y \in L^* \cap S^*} \hat{\varphi}(g^{-1}y) |X(g)|^{-2} \} dg$$

$$\Gamma \backslash \Gamma' \backslash L \quad \frac{1}{c_2} = \int_{V/L} dx$$

$$\hat{\varphi}(y) = \int_V \varphi(x) e^{2\pi i V \overline{F} x \cdot V} dx$$

$$\begin{aligned}
& Z_{\varphi^*}^{L^*}(s) \\
&= \int_{\substack{G/\Gamma \\ |x'(g)| \geq 1}} |x'(g)|^s \sum_{y \in L^*} \varphi^*(\tau g^{-1} \cdot y) dg \\
&+ C_{L^*} \int_{\substack{G/\Gamma \\ |x(g)| \geq 1}} |x(g)|^{2-s} \sum_{x \in L'} \hat{\varphi}^*(g \cdot x) dg \\
&- \int_{\substack{G/\Gamma \\ |x'(g)| \leq 1}} |x'(g)|^s \left\{ \sum_{y \in L^* \cap S^*} \varphi^*(\tau g^{-1} \cdot y) - C_{L^*} \sum_{x \in L \cap S} \hat{\varphi}^*(g \cdot x) |x'(g)|^2 \right\} dg \\
\text{ただし } \frac{1}{C_{L^*}} &= \int_{V^*/L^*} dx^* \quad \hat{\varphi}^*(x) = \int_{V^*} e^{2\pi i \langle x, y \rangle} \varphi^*(y) dy^*
\end{aligned}$$

よって

$$\begin{aligned}
W_{\varphi}^L(s) &= \int_{\substack{G/\Gamma \\ |x(g)| \geq 1}} |x(g)|^s \sum_{x \in L'} \varphi(g \cdot x) dg \\
&+ C_L \int_{\substack{G/\Gamma \\ |x'(g)| \geq 1}} |x'(g)|^{2-s} \sum_{y \in L^*} \hat{\varphi}(\tau g^{-1} \cdot y) dg
\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
X_{\varphi}^L(s) &= \int_{\substack{G/\Gamma \\ |x(g)| \leq 1}} |x(g)|^s \left(C_L \sum_{y \in L^* \cap S^*} \hat{\varphi}(\tau g^{-1} \cdot y) |x(g)|^{-2} \right. \\
&\quad \left. - \sum_{x \in L \cap S} \varphi(g \cdot x) \right) dg
\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
X_{\varphi^*}^{L^*}(s) &= \int_{\substack{G/\Gamma \\ |x'(g)| \leq 1}} |x'(g)|^s \left(C_{L^*} \sum_{x \in L \cap S} \hat{\varphi}^*(g \cdot x) |x'(g)|^{-2} \right. \\
&\quad \left. - \sum_{y \in L^* \cap S^*} \varphi^*(\tau g^{-1} \cdot y) \right) dg
\end{aligned}$$

と掛ければ、仮定 I が成立するとき、 $W_{\varphi}^L(s)$ は s の整函数であり、 $X_{\varphi}^L(s)$ 、 $X_{\varphi^*}^{L^*}(s)$ は $\text{Re } s$ が十分大なるとき、 s の正則函数で、

$$\text{等式 } Z_{\varphi}^L(s) = W_{\varphi}^L(s) + X_{\varphi}^L(s)$$

$$Z_{\varphi^*}^{L^*}(s) = C_L^* W_{\varphi^*}^L(\nu-s) + X_{\varphi^*}^{L^*}(s)$$

が成立する。いま次の仮定を“仮定 II”とよぶことにしよう。

仮定 II $X_{\varphi}^L(s)$, $X_{\varphi^*}^{L^*}(s)$ はともに s の全平面で有理型な解析函数に接続され、等式 $X_{\varphi^*}^{L^*}(s) = C_L^* X_{\varphi}^L(\nu-s)$ が成立する。

仮定 I, 仮定 II が成立するならば, $Z_{\varphi}^L(s)$, $Z_{\varphi^*}^{L^*}(s)$ はともに s の有理型函数に解析接続され、函数等式

$$Z_{\varphi^*}^{L^*}(s) = C_L^* Z_{\varphi}^L(\nu-s)$$

を満足する。よって定理 A と命題 1 とをあわせて次の命題をうる。

命題 2

仮定 I, 仮定 II がともに満足されているならば, $\xi_i(s)$, $\xi_i^*(s)$, ($i=1, 2, \dots, l$) は全平面で有理型な解析函数に解析接続され、函数等式

$$\xi_i(\nu-s) = C_L^* b_0^{-s} (2\pi)^{-as} (\sqrt{-1})^{as} \prod_{k=1}^d \Gamma(s + \lambda_k) \times \sum_{j=1}^d (\text{sgn}_i P \text{sgn}_j Q)^{-s} C_{j,i}(s) \xi_j^*(s).$$

(記号については定理 A を参照) を満足する。

いま仮定 I が満足されているとして、仮定 II が成立するための一つの十分条件を与えよう。

いま $G_1 = \{g \in G; \chi(g) = 1\}$ とする。

仮定 II₁'

任意の $\varphi \in \mathcal{S}(V)$, $\varphi^* \in \mathcal{S}(V^*)$ に対して
積分 $\int_{G_1/\Gamma} \sum_{x \in L} \varphi(g \cdot x) dg$, $\int_{G_1/\Gamma} \sum_{y \in L^*} \varphi^*(g \cdot y) dy$

は絶対収束する。

仮定 II₂'

S, S^* はそれぞれ有限個の G_1 -orbit (それぞれ $S_1, \dots, S_m; S_1^*, \dots, S_m^*$ とする) の和となり、

各々の orbit は G_1 の作用で不変な測度をもち (それぞれ $\mu_1, \dots, \mu_m;$

μ_1^*, \dots, μ_m^* とする) さらにそれぞれ不変測度は次の性質をもつとする。

$$\forall \varphi \in \mathcal{S}(V), \varphi^* \in \mathcal{S}(V^*) \text{ に対して}$$

$$\int_{S_i} \varphi(g \cdot x) d\mu_i(x) = |\chi(g)|^{-2i} \int_{S_i} \varphi(x) d\mu_i(x)$$

$$\int_{S_i^*} \varphi^*(\tau g^{-1} \cdot \varphi) d\mu_i^*(\varphi) = |\chi'(g)|^{-n_i^*} \int_{S_i} \varphi^*(\varphi) d\mu_i(\varphi)$$

($\forall g \in G$; n_i, n_i^* は定数)

いま仮定 Π_1', Π_2' が満足されているとして
 $L \cap S_i$ の Γ -同値類の代表系を $z_i(\mu)$ ($\mu=1, 2, 3$)
 $L^* \cap S_i^*$ の Γ -同値類の代表系を $z_i^*(\mu)$ ($\mu=1, 2, 3$)
 としよう。

$H_{z_i(\mu)}$ を $z_i(\mu)$ の等方群とし, $\Gamma_{z_i(\mu)} = \Gamma \cap H_{z_i(\mu)}$
 とおき, $G_1, H_{z_i(\mu)}$ の不変測度 $d g_1, d h_{z_i(\mu)}$
 をそれぞれ, $d g = d^x |\chi'(g)| d g_1$

$$d g_1 = d \mu_{z_i}(\varphi_1, z_i(\mu)) d h_{z_i(\mu)}$$

なるように定め

$$\sigma_{z_i(\mu)} = \int_{H_{z_i(\mu)} / \Gamma_{z_i(\mu)}} d h_{z_i(\mu)} \quad \text{とおく。}$$

$\sigma_{z_i^*(\mu)}$ も同様に定義する。

仮定 Π_1', Π_2' が満足されているならば,
 $\sigma_{z_i(\mu)}, \sigma_{z_i^*(\mu)}$ はともに有限で, $X_{\varphi}^L(\sigma), X_{\varphi^*}^{L^*}(\sigma)$
 を定義する積分と和とは順序を交換することか
 でき, 初等的変形のうち, Res が十分大なる
 とき次式の成立することが証明できる。

$$\begin{aligned}
& X_{\hat{\varphi}}^L(\mathcal{A}) \\
&= C_L \sum_{i=1}^{m^*} \frac{1}{\mathcal{A} - \mathcal{N} + \mathcal{N}_i^*} \left(\sum_{\mu=1}^{\infty} \sigma(z_i^*(\mu)) \right) \int_{S_i^*} \hat{\varphi}(y) d\mu_i^*(y) \\
&\quad - \sum_{i=1}^m \frac{1}{\mathcal{A} - \mathcal{N}_i} \left(\sum_{\mu=1}^{\infty} \sigma(z_i(\mu)) \right) \int_{S_i} \varphi(x) d\mu_i(x)
\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
& X_{\hat{\varphi}^*}^{L^*}(\mathcal{A}) \\
&= C_{L^*} \sum_{i=1}^m \frac{1}{\mathcal{A} - \mathcal{N} + \mathcal{N}_i} \left(\sum_{\mu=1}^{\infty} \sigma(z_i(\mu)) \right) \int_{S_i} \hat{\varphi}^*(x) d\mu_i(x) \\
&\quad - \sum_{i=1}^{m^*} \frac{1}{\mathcal{A} - \mathcal{N}_i^*} \left(\sum_{\mu=1}^{\infty} \sigma(z_i^*(\mu)) \right) \int_{S_i^*} \varphi^*(y) d\mu_i^*(y)
\end{aligned}$$

(仮定 II' によつて上式右辺の積分と級数は絶対収束する)

従つて次の命題を得る。

命題 3 仮定 I, 仮定 II', II' が成立しているならば仮定 II が成立している。

(注意 仮定 II' が成立しておらず、仮定 II の成立している例はある)

§2

以下 $V = V^{(n)}$ を n -次の hermite 行列をなす vector 空間とし、 $G = G^{(n)} = GL(n, \mathbb{C})$ とする。 G の V への作用は、 $g \cdot x = gx\bar{g}'$ である。

V とその双対を内積 $\langle x, y \rangle = \frac{1}{2} \text{tr} X Y$ によつて

以後同一視する。さすれば ${}^t g^{-1} \cdot x = \bar{g}^{-1} x \bar{g}^{-1}$ である。

V の測度 dx を

$$dx = K_n \prod_{i < j} d\operatorname{Re} x_{ij} \, d\operatorname{Im} x_{ij} \prod_i dx_{ii}$$

$$(K_n = 2^{-\frac{n}{2}}, \quad x = (x_{ij}))$$

と定める。さすれば Fourier 反転公式は下図の如

$$\begin{aligned} \hat{\varphi}(y) &= \int \varphi(x) e^{2\pi i \sqrt{t} \langle x, y \rangle} dx \\ \Rightarrow \varphi(x) &= \int \hat{\varphi}(y) e^{-2\pi i \sqrt{t} \langle x, y \rangle} dy \end{aligned}$$

$L = L^{(n)}$ を行列要素がすべて Gauss の整数となる V の元をなす格子とし、 $\Gamma = \Gamma^{(n)} = GL(n, \mathbb{Z}[\sqrt{t}])$ とする。 L は Γ の作用で不変で、 L の双対格子 L^* は L の元で対角要素がすべて偶数なるものなる部分格子である。

$$\chi(g) = |\det g|^2, \quad P(x) = Q(x) = \det x$$

$$\text{とおけば, } P(g \cdot x) = \chi(g) P(x)$$

$$Q({}^t g^{-1} \cdot y) = \chi^{-1}(g) Q(y) \quad \text{である。}$$

また $d(g \cdot x) = \chi(g)^m dx$ であり従って前節の n は m の場合 n に等しい。

$$S = S^* = \{x \in V, \det x = 0\}, \text{ とおき,}$$

V_i を正の固有値 i 個, 負の固有値 $n-i$ 個を有する V の元をなす集合とすれば,

$V-S = V^* - S^* = \bigcup_{i=0}^n V_i$ で V_i は G の一つの orbit である。前節定理 A は、この特別な場合は、次のようになる。

定理 A' いま

$$t_{ij}(s) = (-1)^{(n-i)(n-1)} e^{\pi\sqrt{-1}s} \binom{n-i-j}{j} \binom{n-j}{i-j} e^{\frac{2\pi\sqrt{-1}sd}{2}}$$

とおけば、

$$\begin{aligned} & \int_{V_i} \varphi(x) |\det x|^{s-n} dx \\ &= K_n \pi^{-sn + \frac{n(n-1)}{2}} \Gamma(s) \Gamma(s-1) \cdots \Gamma(s-n+1) \times \\ & \quad \times \sum_{j=0}^n t_{ij}(s) \int_{V_j} \varphi(x) |\det x|^{-s} dx \end{aligned}$$

[証明]

定理 A より、 φ の台は $\det x \det \begin{pmatrix} x_{22} & \cdots & x_{2n} \\ \vdots & & \vdots \\ x_{n2} & \cdots & x_{nn} \end{pmatrix} \neq 0$ なる集合と交わらない compact set であるとして

証明すれば十分である。いま

$$B_+ = \left\{ \begin{pmatrix} t_1 & & \\ & \ddots & \\ & & t_n \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & & \\ & \ddots & \\ & & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} z_{1j} & & \\ & \ddots & \\ & & z_{nj} & 1 \end{pmatrix} ; \begin{matrix} t_1, \dots, t_n > 0 \\ z_{ij} \in \mathbb{C} \end{matrix} \right\}$$

とおけば、 V は B_+ の作用に関してすでに根元均質で、測度 0 の集合を無視すれば、

$$V_i = \bigcup_{(\varepsilon_1, \dots, \varepsilon_n)} B_+ \cdot \begin{pmatrix} \varepsilon_1 & & \\ & \ddots & \\ & & \varepsilon_n \end{pmatrix} \quad \text{である。}$$

(ただし $\varepsilon_1, \dots, \varepsilon_n = \pm 1$, $\varepsilon_1 + \dots + \varepsilon_n = 2i - n$)

いま B_+ の left Haar measure db_+ を

$$d\theta_+ = d^*t_1 \cdots d^*t_n \prod_{i>j} d\operatorname{Re} z_{ij} d\operatorname{Im} z_{ij}$$

と定義すれば,

$$\int_{V_i} \varphi |\det x|^{s-n} dx$$

$$= 2^n \cdot K_m \int_{B^+} \sum_{(\varepsilon_1, \dots, \varepsilon_n)} \int \varphi(y) e^{2\pi i \sqrt{-1} \langle y, \theta_+ \cdot \begin{pmatrix} \varepsilon_1 \\ \vdots \\ \varepsilon_n \end{pmatrix} \rangle} dy (t_1 \cdots t_n)^{2s} d\theta_+$$

である。ここで積分の順序を交換すれば

(その際多少注意を要する) 初等的計算で
定理の結果を得る。

以下仮定 I が成立していることを検証する。

Hermite 型式の理論によつて l を自然数と
するとき, $\det x = (-1)^{n-l} l$ なる $L^{(i)} = L \cap V_i$
の元の全体は有限個の Γ -orbit の和となる
各軌道から一つずつえきとてそれらを,

$x_1^{(i)}(l), \dots, x_{h^{(i)}}^{(i)}(l)$ とし, それらのうち
 L^* に属するものを

$x_1^{(i)*}(l), \dots, x_{h^{(i)*}}^{(i)*}(l)$ としよう
さすれば $\bigcup_{i=0}^n \bigcup_{l=1}^{\infty} \bigcup_{h=1}^{h^{(i)}} x_h^{(i)}(l), \bigcup_{i=0}^n \bigcup_{l=1}^{\infty} \bigcup_{h=1}^{h^{(i)*}} x_h^{(i)*}(l)$
はそれぞれ, L, L^* の Γ -同値類の代表系で
ある。§1 に従つて $\Gamma(x_h^{(i)}(l)), m(x_h^{(i)}(l)),$
 $\Gamma^*(x_h^{(i)*}(l)), m^*(x_h^{(i)*}(l))$ を定義する。

以下 G の不変測度 $d\varrho$ を, $i=0, \dots, n$ なるとき,
 $m(x_k^{(i)}(l))$ が有限群 $\Gamma(x_k^{(i)}(l))$ の 逆数
 と等しくなるように正規化する (可能である)。 位数の

このとき $\sum_{k=1}^{h(l)} m(x_k^{(i)}(l))$,
 は行列式 $(-1)^{n-i}$ なる $L \cap V_2$ の元々の
 種達の種の測度の和に等しい。 $\sum_{k=1}^{h^*(l)} m(x_k^{(i)*}(l))$
 についてと同様のことがいえる。従って Hermite 形式
 の理論により, それらの $l \rightarrow +\infty$ のときの増大度
 は l の適当な中乗でおさえられることがしられる。

よって Dirichlet 級数

$$\sum_{l=1}^{\infty} \frac{\sum_{k=1}^{h(l)} m(x_k^{(i)}(l))}{l^s} = \zeta_i^{(n)}(s)$$

$$\sum_{l=1}^{\infty} \frac{\sum_{k=1}^{h^*(l)} m(x_k^{(i)*}(l))}{l^s} = \zeta_i^{(n)*}(s)$$

は $\text{Re}(s)$ が十分大なるとき絶対収束する。すな
 わち仮定 I が成立している。なお正規化された
 $d\varrho$ は具体的には次のように記述される。いま e_{ij}
 を i 行 j 列成分が 1 で, 他は 0 なる $gl(n, \mathbb{C})$
 の元とし, $\omega_{ij}, \omega'_{ij}$ をそれぞれ $e_{ij}, \sqrt{-1}e_{ij}$ と
 双対な G 上の左不変微分形式とすると,

$$\int f(\varrho) d\varrho = C_n \int f(\varrho) \prod_{i,j=1}^n \omega_{ij} \wedge \omega'_{ij}$$

$$(C_n = K_n \prod_{k=1}^n \Gamma(\frac{n+1}{2}) \prod_{k=1}^n \Gamma(k))$$

なお 後に用いられる定数 J_n を次のように定義する。

$$J_n = \int_{G_2^{(n)}/\Gamma^{(n)}} \prod_{i \neq j} d\omega_{ij} d\bar{\omega}_{ij} \prod_{1 \leq i < j \leq n} d\omega_{ii} d\bar{\omega}_{ii}$$

($G_2^{(n)}$ の定義は下に与へられている)

次に仮定 II_1, II_2 が成立していることを検証する。Weil の論文 "La Formule de Siegel et les groupes classiques" (Acta 1965) 20 頁の Lemma 5 によれば

は "今の場合

$$\int_{G_1/\Gamma} \sum_{x \in L} \varphi(g \cdot x) dg \quad (\varphi \in \mathcal{S}(V))$$

$$\int_{G_1/\Gamma} \sum_{y \in L^*} \varphi(g^* \cdot y) dg$$

がともに絶対収束することがわかる。

よって仮定 II_1 は成立している。

$$(G_2 = G_2^{(n)} = \{g \in G, |\det g| = 1\})$$

$V^{(n, r)}$ で rank r の Hermite 行列のなす

V の部分集合, $V_i^{(n, r)}$ で正の固有値を i

個, 負の固有値を $r-i$ 個もつ元より

なる $V^{(n, r)}$ の部分集合を表わすことにす

れば, $V_i^{(n, r)}$ は G_2 の 1 つの orbit で

$S = \bigcup_{\tau=0}^{n-1} \bigcup_{i=0}^{\Gamma} V_i^{(n, \tau)}$ である。

$V^{(n, \tau)}$ の測度 $d\mu^{(n, \tau)}$ を次の如く定めれば、それは G_+ の作用で不変である。

$$d\mu^{(n, \tau)} = \left| \det \begin{pmatrix} X_{11} & \dots & X_{1\tau} \\ \vdots & & \vdots \\ X_{\tau 1} & \dots & X_{\tau\tau} \end{pmatrix} \right|^{t-n} \prod_{\substack{i > j \\ j \leq \tau}} d\operatorname{Re} X_{ij} d\operatorname{Im} X_{ij} \times \prod_{k \leq l \leq \tau} dX_{kl}$$

τ > 0 ならば $V^{(n, \tau)} \ni x = (x_{ij})$ なるとき

τ = 0 ならば

$$d\mu^{(n, \tau)} = \delta(0)$$

そして

$$\int_{V_i^{(n, \tau)}} \varphi(g \cdot x) d\mu^{(n, \tau)} = |X(g)|^{-2} \int_{V_i^{(n, \tau)}} \varphi(x) d\mu^{(n, \tau)}$$

($\varphi \in \mathcal{S}(V)$, $g \in G$)

である。よって仮定 Π_2' が成立していることがわかる。

$L \cap V_i^{(n, \tau)}$ の Γ 同値類の代表系として

$$\left\{ \begin{pmatrix} x_{\tau} & 0 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}, \quad \begin{array}{l} x_{\tau} : L^{(\tau)} \cap V_i^{(\tau)} \text{ の} \\ \Gamma^{(\tau)} \text{ 同値類の代表系} \end{array} \right\}$$

をとることができることに注意すれば、 $X_0^L(\mathcal{A})$, $X_{\varphi^*}^{L^*}(\mathcal{A})$ は前節よりさらに具体的に次の如く表示されることがわかる。

$$\begin{aligned}
& X_0^L(s) \\
&= C_L \sum_{r=0}^{n-1} \sum_{i=0}^r \frac{1}{2ns - 2n^2 + 2rn} \frac{C_n}{C_r} t_{n-r} \sum_i^{(r)*} (n) x \\
&\quad \times \int_{V_i^{(n,r)}} \hat{\varphi}(x) d\mu^{(n,r)}(x) \\
&\quad - \sum_{r=0}^{n-1} \sum_{i=0}^r \frac{1}{2ns - 2rn} \frac{C_n}{C_r} t_{n-r} \sum_i^{(r)} (n) x \\
&\quad \times \int_{V_i^{(n,r)}} \varphi(x) d\mu^{(n,r)}(x)
\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
& X_{\varphi^*}^{L*}(s) \tag{#} \\
&= C_L^* \sum_{r=0}^{n-1} \sum_{i=0}^r \frac{1}{2ns - 2n^2 + 2rn} \frac{C_n}{C_r} t_{n-r} \sum_i^{(r)} (n) x \\
&\quad \times \int_{V_i^{(n,r)}} \hat{\varphi}^*(x) d\mu^{(n,r)}(x) \\
&\quad - \sum_{r=0}^{n-1} \sum_{i=0}^r \frac{1}{2ns - 2rn} \frac{C_n}{C_r} t_{n-r} \sum_i^{(r)*} (n) x \\
&\quad \times \int_{V_i^{(n,r)}} \varphi^*(y) d\mu^{(n,r)}(y)
\end{aligned}$$

$$(\text{いまの場合 } C_L = 2^{\frac{n}{2}} \quad C_L^* = 2^{-\frac{n}{2}})$$

また t_n は 前々頁で定義された数

また $C_0 = 1$ とおく

最後に $\xi_i^{(n)}(s)$, $\xi_i^{(n)*}(s)$ の極における留数を計算する。

いま φ の台が compact で V_i に含まれているとする。さすれば

$$\begin{aligned} & \xi_i^{(n)}(s) \int_{V_i} \varphi(x) |\det x|^{s-n} dx \\ &= W_\varphi^L(s) + C_L \sum_{r=0}^{n-1} \sum_{i=0}^r \frac{1}{2n-1-2n^2+2rn} \frac{C_{n+r-i} \xi_i^{(n)*}(s)}{C_r} \\ & \quad \times \int_{V_i^{(n,r)}} \hat{\varphi}(x) d\mu^{(n,r)}(x) \quad (4) \end{aligned}$$

である。

$W_\varphi^L(s)$, $\int_{V_i} \varphi(x) |\det x|^{s-n} dx$ は, φ に関する仮定からとくに exponential type の整函数数である。従って $\prod_{r=0}^{n-1} (s-n+r) \times \xi_i^{(n)}(s)$ は exponential type の整函数数の比として表示される整函数数で、その位数は 1 を超えない。 (Titchmarsh Theory of Functions の 255 頁をみよ) さらに定理 A' の証明と同じ方法で次の命題が証明される。

命題 φ の台が compact で、 $V-S$ 内に含まれるならば、

$$\begin{aligned} & \int_{V_i^{(n, r)}} \varphi(x) d\mu^{(n, r)}(x) \\ &= K_r \pi^{-\frac{r(r+1)}{2}} \Gamma(r) \Gamma(r-1) \cdots \Gamma(1) \times \\ & \times (\sqrt{-1})^{rn} (-1)^{(r-i)(n+r+1)} \binom{r}{i} \times \\ & \times \int_V \varphi(x) (\det x)^{-r} dx \end{aligned}$$

この命題と前頁(4)より

$\Sigma_i^{(n)}(s)$ の $s = n-r$ における留数は

$$\begin{aligned} & (-1)^{(n-i)r} C_L \frac{1}{2n} \frac{C_n}{C_r} \delta_{n-r} K_r \pi^{-\frac{r(r+1)}{2}} \Gamma(r) \cdots \Gamma(1) \times \\ & \times (\sqrt{-1})^{rn} \sum_{j=0}^r \binom{r}{j} (-1)^{(r-j)(n+r+1)} \Sigma_j^{(r)*}(n) \end{aligned}$$

である。

同様に $\Sigma_i^{(n)*}(s)$ の $s = n-r$ における residue は

$$\begin{aligned} & (-1)^{(n-i)r} C_L^* \frac{1}{2n} \frac{C_n}{C_r} \delta_{n-r} K_r \pi^{-\frac{r(r+1)}{2}} \Gamma(r) \cdots \Gamma(1) \times \\ & \times (\sqrt{-1})^{rn} \sum_{j=0}^r \binom{r}{j} (-1)^{(r-j)(n+r+1)} \Sigma_j^{(r)}(n) \end{aligned}$$

である。

以上で冒頭の定理は証明された。